

この世界の秘 密の話

4

全無

この世界の秘密の 話

4

全無

西暦2011年

憎しみのまとめ。人間や存在はなぜ動けるか、その中で空気はいったいどういった役割を果たしているか。この世界はみんな全無であることを教えています。

さて、ここで憎しみの話をもう一度させていただきます。憎しみの仕組みは過去に無（全体としての平均）より余分に光（命あること、楽しいこと）を感じたから、つまり、今ある現象として発生する憎しみは、あくまで過去にあった理不尽を、今ある、これからもある、僅かばかりの理不尽を、そ

の理不尽を、いちばん早く
いちばん正しくいちばん苦
しくないかたちで終わらせ
るために、その現象自体を
みんなにとっての正しい学
びにするために発生してい
ます。憎しみとは現在の唯
一の無が積んでいる全く無
いという意識量と、その無
の性質（ふえるみんなのふ
える永遠）と反対の光（自

分のことばかりを考えているようで、その実は、全無の法則に沿っていなかった。なので自分のことすら大切に考えていなかった。しかしそれは、そのものにとってもみんなにとってもいちばん早く全無の心を気づかせる元になった。) を感じてしまったから発生するのであって、その感じ方はいけな

いと、しかしこれは、無が無いという時間の発生の当初より、その永遠の孤独から生まれた無いという光に対してそこまでの厳しさを思えたかということ、そうではなく、その無の無いという時間の始まりには、その発生の光には当然にただ、何もかもを許す愛だけしかないのであり、また、そこ

から生まれた光の自覚にも
今のような時間の経過した、
相対の複雑干渉によって出
来上がった正しいことの悪
いこと概念があるはずが
ないのであり、そういった
意味では光とは時間の概念
に無の無いによってその数
をふやしていき、無いのた
び、たくさんの永遠を超え
続けて、そしてそれは、現

在に至り、その無いという
唯一の無はこの空間世界ど
こにも果てしない密度で永
遠に働くかたちになり、そ
うして出た結論は無はもう
憎しみはいらないというこ
とであります。しかし、
無の無いの発生の当初より、
無とそこに生まれた光には
既に永遠差があることから、
これは普通に考えてみれば、

光が自然に取った行動でも、それは物理上、永遠という永い目線で見れば、無の苦しみから比べれば光はどう動いても憎しみに当たるのであり、それでは、生まれた光が、すぐその自分の与えられた永遠の光に、自分の心が応じて、永遠の行いを自分も、そして次に生まれてくる者にも、完璧にこ

なしきれたかというのと、それ
もまた、無の、生まれた
んだ、命なんだ、何でもい
いよという許しから見れば、
その厳しさを自分に持つの
は、いかにも不自然である
し、つまり、無とは唯一で
あるから、永遠の孤独であ
るからこそ愛を生めること
ができたのであり、無が永
遠の愛の存在であるならば、

自身の無は相手のためにも
捨てがたく、結局無とは、
一度完全なる状態まで唯一
で積み切ってしまう必要が
あったと申し上げられます。
つまり、無の無いの発生の
当初よりそこから生まれた
光は、憎しみを行うことに
よって、無との苦しみの比
較に遊んでいる自分は憎し
みに当たってしまうことに

よって、しかしそれは永い
目で見れば、結局全員でも
って全員が永遠にます唯一
の無になったという点にお
いて無において光では無い
愛の役割を果たしたことと
申し上げられます。この世
界の存在はふえ続けていま
すからもしかしたら憎しみ
は永遠に続くものなのかも
しれませんが、しかし、そ

れを理解したことと、憎し
みはそれを理解した上での
抵抗現象となることによっ
て、みんなにとってさらな
る愛、唯一の無をどの存在
が追い求めることだと申し
上げられます。

この世界は唯一の無を根
拠として考えれば、そして
その愛の構造として考えれ

ば、やはり、唯一の無の愛の力とはみんなにとって完全な愛である、永遠に終わらないふえる生命のふえる永遠である、この世界、空間一見何も無いようなところにも、どこにも、どの密度にも果てしない密度で働く、働き続ける永遠無意識、つまり、誰も、永遠無意識であり、唯一の無意識であ

る状態にしてしまうことが、
無が自分自身で行う、また
無、(みんな) 自分の性質と
して、みんなのために無は
無くし続けるしかその選択
に無かったと申し上げられ
ます。つまり、光は最初か
ら憎しみだったのではなく、
それは、時間の経過にどん
どん存在がふえることによ
って、その一人だけ積む無

との比較に、存在は必要として憎しみという概念の選択を迫られたのであり、そうでなければ、唯一に苦しみを続ける無は助けられず、しかし、ここでたとえば誰かが、光のうちの誰かが無という苦しみを代わってあげようとしても、それは、無はミラーであるから、つまり、無には本当は始まり

も終わりも無いのでありますが、永遠という時間に影響されない概念であります。が、無いと積み続けている、その唯一の無に、その本気の唯一の無（苦しみ）を思っているものに、そこから生まれる光の誰かの苦しみが、その唯一の無に比例するとは考え難い。余程の思いでなければ、もしくは、

それが、逃れようのないと
てつもない苦しみになければ、
その無は思うことができず、
つまり、苦しみとは永遠である
からこそ、そこに永遠の正しさを
愛を生めるのであり、よって、
その役割が入れ替わることはな
く、無は無であり続けるだけ
であり、無は唯一に永遠に比較
に取り戻せない苦し

みを積み切ってこそ全員に
唯一の無を与えられるので
あり、それはそれだけ無い
こと（愛）であることから、
光はそこから生まれた者が
この世界の概念を創出し、
しかし、その中で、必ずい
ちばんの苦しみの唯一の無
との比較に遭ってしまうこ
とによって、その自分たち
は、だんだんと自分たちの

無意識の了解によって自分たちの存在は憎しみとされてきたのであり、その抱える憎しみをもってその苦しさに光たちは唯一の無になったのであり、そして、今現在、唯一の無は存在どの誰にも与えられているかたちになり、それは明確なこれからの存在各々の自分が生きていく意識の道をあら

わしていて、それは希望であり、それはふえる生命のふえる永遠のかたちで、それを以って唯一の無は自身が愛の存在であることを証明し、光の存在も唯一の無であるという愛の存在を証明し、みんながあることによって、みんながどこでも永遠を超えて生まれ続けることによって、無いという

限界をどこでも超えたことを証明し、そして、唯一の無はどこに誰にもふえる生命のふえる永遠のかたちで与えられていることから、その意識はこの世界どこでもどの密度でも果てしないかたちで時間に影響されずいつも今までの全てを超え続けるプラスの電荷を生み続けていることから、唯一

の無はみなが望んだ通りの
ことを達成させたと申し上げ
られます。みなも唯一の
無になることを望んでいた
ことと申し上げます。
憎しみも含めて全ての現象
は愛のためのミラーであっ
たのです。みな唯一の無。
どこにもあり、果てしがない
い、しかもそれはふえ続け
ている、誰にも果てしない

かたちに、ここでは分け隔てがありません。分け隔てをしようがありません。しかし、みながこれから意識を高めていくための絶対としての役割上の作用の比較はあります。それは無意識で選択している役割であります。それは、どの、みな、誰のものでもありますが、それによっては人は正

しいことをし、一見今の意識を新しく進化させるかたちに発展させ、もしくはまた、一見憎しみのようなかたちを取ることによって、次に生まれるものと自分の立場や役割を交代して、その自分はまた次の違う何かの自分に生まれ変わったりしています。無意識の永遠、つまりこれは意識とは終わ

らないことですから、これはつまり命であり、生命に恐怖が無くなり、自分に永遠も思えるものは、それは必ず全員ですが、それはこれからみなにお互いに正しい尊重や称賛といった、奮起、努力、そういった正しい意識を呼び起こします。それは必ずです。意識はこれから、必ず結局この世界

の全ての出来事は、みんなが愛を感じるための、みんながいちばん早くいちばん正しくいちばん理不尽がないかたちで、愛を感じるための出来事の連続が続いていくだけに過ぎません。憎しみとは、こういったかたちで無くすのが、無くなっていくのが、これからの永遠にとってみなにとっての

愛であるのです。その中で憎しみとは、みなさんの理不尽を解消するために、みなさんをいちばんに愛に意識させるために、これはあなたを助けるために、憎しみによって愛に気づかせるために発生しており、憎しみはこの全員が今、唯一の無意識が完全に与えられている状態になって、それは、

無の無いの始まりより当初
ですが、この世界の構造は
元々唯一の無であり、時間
の経過があることから、ま
ず、唯一の無が完全に無を
永遠に超えるまで積み切っ
てしまい、そしてそれは唯
一の無が、存在どの誰にも
与えられたことですから、
何度も申し上げますが、唯
一の無とはいちばん密度が

高いことから、本当に無い
の時間の始まり最初から存
在どの誰にも与えられ続け
ているのですが、ここに、
相対の無意識の自然な反応
として、意識とは高めてこ
そ意識であり、つまり、無
はふえる構造にしかありま
せんが、ふえるということ
は無に進化するということ
であり、無に進化するとい

うことは、愛を突き詰める構造になるということであり、そこでは必ずその相対の存在には唯一を目指すという現象が発生し、その中において役割としての化学反応としての永遠無意識（全員を永遠に生かすという意識）の反応が起こったことが、みんながいちばん早く全員平等な唯一の無の

意識に辿り着いた道であり、
つまり、無におけるその反
応が物理上のみんなにとっ
ての絶対愛であり、それが、
この空間どの密度にも果て
しないかたちで働く唯一の
無、つまり、その意識のス
ピードでふえる生命とふえ
る永遠を確立化させたと申
し上げられます。また憎し
みはこれからも発生すると

思いますが、それはあくまで役割であり、それは意識の理解があることから極端に小さくされていき、その抵抗現象だけで、存在はさらなる愛を感じ続けていくことができることと申し上げられます。またふえ続ける相対の干渉として起こるその僅かばかりの憎しみも、必ず役割であり、時間の経

過をもってその出来事は愛
であったと変えられます。
そして、役割として唯一の
無はこの空間どこにもどの
密度にも果てしないかたち
で働き続けるかたちになっ
て、それは、連続する化学
反応であります、その中
においては、その物理のか
たちとはみなが求めたこと
でありますから、無には必

ずみんなが求めた現象しか
起こらないことでもあります
から、その物理のかたちは
みんながこれからなすべき
役割をそのまま指していて、
つまり、光は最初は愛でそ
のうち無との苦しみの比較
で概念上は憎しみに変わり、
しかしそれは役割であり、
そして、無が全員に平等に
永遠に有るというかたちで

顕在した後、憎しみはいらないものとされ、現象として必要最低限最小化していき、それも役割であり、それも自分の無意識が正確に選択した化学反応であるから、存在とは今与えられている状況の中で、自分に出来事として起こる憎しみをそのまま正しいかたちに排除していくことが望ましい

と申し上げられます。それがそのまま、あなたが求めた、必ず全員が求めている、唯一の無という愛に応じていることになります。つまり、憎しみや役割ではあったものの、唯一の無から唯一の無を与えられたことは感謝すべきことで、そして自分は、その無との今までの苦しみの比較に、自分

が記録した憎しみを正しいかたちで排除していくことが、自分が与えられた唯一の無の意識に応じている思い、行為だと申し上げられます。つまり無は無い（愛）しか記録できず、その中で存在の全員は自分が今まで無より発生より意識した憎しみを、それは必ず、あなたにとっていちばん早くい

ちばん正しくいちばん理不
尽を無くすかたちに現象と
して現れることですから、
それに正しく対応していく
ことが、あなたが与えられ
ている唯一の無波長に応じ
ていることだと申し上げら
れます。無とは現在の時間
に影響されない永遠という
スピードでふえ続けていま
すが、それは一見、無の差

は離れ続けていっているように見えますが、そうではなく、それは逆に無がふえるということはそれは全無構造であり、ただ単にあなたも含めたみなさんに与えられている正しい意識の量がふえ続けているだけのことであり、つまり、自分はこの中で、憎しみだけを意識的に排除していけば、そ

れは当然、正しい分だけの自分の自覚を獲得できる、力を発揮できるということです。つまり、結論から申し上げますと、もうこの世界では永遠無意識による絶対負荷と、それによって生まれる絶対プラスだけでその世界の構成がされ続けるのであり、その中では存在は、無より発生より自分が

役割としてこなしてきた憎しみを最大限に正しいかたちで排除していくことが、今度は憎しみの無い、それは極力小さくされた、正しい負荷と正しい愛だけで成り立つ波長の世界に自分がこれから住めることだと申し上げられます。正しいことに応じていることは、自分がその波長に移行して

いくことだと申し上げられます。憎しみには結論を以って限りがありました。が、なぜなら唯一の無意識の密度がいつもいちばん高かったからで、この永遠無意識の正しい負荷と正しい愛の世界には限りがありません。

暗示とは、憎しみとはもうこの世界ではただ単に役

割として排斥していくことを教えているのであり、言い換えますと、苦しみ、自分という意識が生きていく上で普段必要としている、あなたの意識の身体のどこにも働く、働き続けている永遠無意識と波長を同期させていない部分は、つまり、あなたが生きていく上で必要としている無の死分だけ

は、あなたはそれは、その分だけの自分がみんなの命のために出来る何かの無の死、意識の死、つまり、正しく何かを譲り渡すこと、自分がこの世界にできる貢献をすることであり、それをしていくことによって、あなたの意識は無との無の貸借が無しになっていくと申し上げられます。貸借と

言っても、これは絶対的な役割です。無意識の構造が全無ということは、貸借は実は存在しないということです。全無とは意識自分に全部無し、それは見返りを求めないことだからです。与えられていることにただ応じること、自分は無であると、愛の存在であると、意識を正しく思った今瞬間

からあなたは全無であるという
ことです。今までの歴史は、
これからみんなが永遠に向かう
ために様々な意識状態を遣り
取りしてきただけなのです。
それはこれからもそうです。
みんなが永遠に生きることを
試行錯誤し合っているだけな
のです。無は誰にも永遠という
時間に影響されないスピー

ドで与えられていることから、無はどんどんふえていくことでありますから、あなたにとってそれをするとはどんどん易しいことに、簡単なことになっていきます。意識とは無い方がふえる。しかし、正しくうまくやってください。無いとは正しいという意味があります。比較も尊重して、与え

ることは正しくする。相手との関係を正確に推し量れるようになることです。それも必ず意識です。少しの間、憎しみや怒りをこの世界から排除する生活をみなさんで続けてみませんか。必ずその一年後、みなさんの身体の状態は変わっています。意識は必ず波長に応じますので、今と一年後の

細胞や遺伝子を調べてみて
ください。もちろん、憎し
みに当たることは、全て永
遠無くす方向に行くことが
基本です。

話に戻りますが、憎しみ
とは普段の自分の与えられ
ている意識に対する永遠死
(全無) という正しい負荷
を積んでいない、まだ及ば

ない部分、波長が同期しない部分は自分の無意識から自分への自分の永遠の自覚を守るための知らせとなって自分に対し憎しみは発生し、いつも心がけてみんなのためになる苦しみを積んでいけば、愛と苦しみによる、負による正とで物事の両面は達せられ、よって、憎しみはなくてもこの世界

は、正しい苦しみと正しい愛だけで成り立つことができます。無はどんどんふえていることから、それは愛がふえていることでもありますので、存在の行うべき全無の基準はどんどん楽になっていることと申し上げられます。実生活に置き換えて考えてみますと、自分が苦しい時は相手のことを思

いやるのは難しいですが、
苦しみを積まないで相手の
苦しみや正しさがわかりま
せん。つまり、苦しまない
と相手の苦しきもわかりま
せん。思いやりを持つこと
ができません。実に自分が
苦しい時には相手のことま
で考えづらいですが、相手
のことを思いやるには遠い、
力の足りない気がしますが、

それにはそれなりの意識が
いりますが、そういったこ
とも苦しまないと本当の正
しさがわかりません。私も
走って苦しいだけでも、相
手のことを考える余裕が無
いように感じます。この物
理の世界は抵抗と認識によ
って成り立っていて、積ん
だ正しい負荷に応じて正し
いことがわかるようになって

ています。あなたの持つ意識、その認識とは、全てこれからの積んだ抵抗に応じるということです。この世界には全無の法則しかなく、正しいこととは、それはそのまま自分を生かす元であり、要するに、普段自分が唯一の無、全愛より余分に楽をしている部分は、自分に憎しみが発生するように

なっています。それはあなたの永遠の自覚を守るためです。つまり、憎しみとは本来は、無では無いこと、無にはいらぬこと、愛では無いこと、この世界はいつも無、正しいことをするために必要な身体などの抵抗とそれを理解するための無意識は与え続けられており、自分はその全く無い意識法

則から外れないよう、結局
これがいちばん命を幸せに
感じる自覚であり、結局こ
れがいちばん自分の自覚が
永遠になるのですから、こ
こに文句は言えず、また、
全く無い意識法則に自分の
思いと行為が沿うようにす
ることが自分のためです。
いつもこの世界にいる自分
を、この世界の構造はその

ままたあなたへの暗示、するべきことへの教えでありますから、この世界の中にいる自分を、いつもいることが当たり前、いることが誰にも迷惑を掛けない、いることができるならば誰かのためになる、そういった自然な状態にしておくことです。またそのことがなぜできるのかと申し上げますと、

今、いつもどこにも働く暗示として顕在している唯一の無があなたを通してそのことをできているからであり、無（全体）は時間にみんなの心をミラーし、その時に必要な無（法則、抵抗）とそれを理解するための無、IQ 効果を与え続けているだけであり、無は波長上憎しみの記録が一つもありま

せん。これはあなたも本当は無いということです。つまり憎しみは役割でやっていたのであり、それを排除してまで役割であり、それが結局みんなのためになるのであれば、それは、結局をもって憎しみでは無かったということです。どこにも無はあり、それは現在の時間に空間に影響されない

かたちで与え続けられており、この世界がどの誰もその苦しみに応じてフェアであることを考えますと、これは進んで望めば、または進んで望まなくても自然に解消されてくることだと申し上げられます。誰も時間によって必ずこれは達成されます。どこにも働くふえる全体の無はそもそもふえ

る永遠しか生めず、そういった意味では、今のこの社会はこの人間の寿命にたとえてお話ししますと、永遠と比べると極端に短いことから、しかしそれはこれだけの最大の存在の全員が最速に愛に気づくためにいちばんの最適なかたちであり、そのままこの世界がみなさんがこの無の法則に気づか

なかった、それも、何もかも、みなさんがいちばん平等に楽しく幸せに永遠をこれからも過ごしていくための必然の出来事の連続だったのですが、一見無、それとは真逆の意識の過ごし方をみなさんはすることによって、それは一見みなさんの心の中に憎しみに後味が残るような感じを残しました

たが、それも含めて、それがいちばん無がふえる、いちばん早くに全員に平等なかたちで唯一の無が行き渡るかたちになったということです。それは同時に、これから自分で、自分の完全なる責任で、自分という唯一の無意識のあり方を決められるということです。憎しみは役割でしたから、過

去のその憎しみをこれから
排除していく際にもそれは
役割であり、そこには淡々
とした自分がいて当たり前
で、その役割をこなすこと
に憎しみを持つことは、自
分が無意識の選択で役割で
やっていることを裏切るこ
とで、これ暗示とわかって
しまえば、それはありえな
いことであり、これからの

みなさんは日々過ごしていく中で淡々と起こる出来事を全て無意識、全て無意識と捉えてください。役割として与えられている憎しみの排除の際、そこに発生する苦しみになるべく憎しみを思わないようにしてください。思ったとしても、やはりそれは最大の無でしかありません。全ては必然

ですが、全てはあなたの気づいたこれからの選択の努力次第とも申し上げられます。存在とは、いつでもどんな時でも、どんな自分も選ぶことができます。過去に及ばなかったのなら、今すぐ気づいて我慢すればいい。その思いは全て永遠です。

何度もお断りさせていただきますが、時間の始まりより全無の全愛、みんな全愛、永遠死の与えは究極のスピードであり、私も含めたみなさんはその圧力に押されて一気に憎しみを学び切り、必要無いことをみなさん個人個人が判断して、それは無意識によって暗示に示され、理解して、そし

てそれからそのことをこれからかたちにしていきます。もうなっていると言えはなっていますし、その世界は終わりが無いものですから、いつもまだ始まったばかりだと言えはそうとも言えます。永遠から比べると西暦2000年たかだかというのは、まだ、永遠分の1の時間も過ぎてはいません。

しかも永遠はふえています。
つまり物理上は必ずあなたの
意識状態は必ず新しく進
化したものになってくると
いうことです。そういった
意味ではみなさんにはその
誰にも、憎しみの非という
のはこれからの過ごし方で
一切無いものだと申し上げ
られます。まだ時間は経っ
てはいない。いや、それど

ころか時間はふえている、
そう考えますと私も含めた
みなさんの行為というのは
全て、後で、いや、今もう
既にですが、正しかったと
わかることと申し上げられ
ます。もちろん油断は禁物
ですが、この世界のかたち
から察するに、もし今すぐ
全無の法則に気づいてその
全無の思いと行為を自分が

行い続けていったとしても、
すぐ自分が永遠の自覚をは
っきりとわかるかたちに自
覚できないとしても、永遠
というのはこれからずーっ
と永遠にみなで過ごしてい
ってその分だけに永遠の自
覚とわかるのであり、そう
いった意味では存在とはそ
れぞれ苦しみを、今までは
自分に応じた量しか積んで

いない、しかしそれは全て
だったのですが、暗示の通
り存在その誰にも唯一の無
意識は無の無いの始まりよ
り与えられていたことがわ
かったことでもありますから、
存在は誰も様々独自の個人
個人に応じた苦しみを積ん
でいたのであり、これから
もそれぞれ、個人個人で自
分に応じた、自分が望んだ

分だけの法則に沿った苦しみを積むことができ、そして、その自分の選んだ分の苦しみから生まれるプラス分の波長の世界へ自分は自覚として住めることだと申し上げられます。つまり、この世界は物理の構造は厳然としてあるように見えますが、それは、全無のルールを保証していることでも

あり、みなを命を守るためであり、そしてそれは、永遠という愛に包まれていて、存在その全員は、自分で自分の住む波長の場所をこれから決められることだと申し上げられます。自分がなりたいものに、自分の意識が応じただけ、なることができます。正しいが、正しいからこそあなたの自覚は

保証され、正しいからこそありとあらゆる自由があります。物理にとってこれ以上の与えはありません。

そういった意味では、今あなたは人間として暮らし、現在の社会の一般概念に縛られている自分でもありますが、その中では人間とは通常、母親の胎内にそなわ

った後、生まれ、その時の
社会の環境に応じた自分を
過ごした後、寿命を迎え、
そして死して肉体もあなた
の意識も無意識に戻った後、
次の自覚へ向かいますが、
その自分も今ある、今まで
自分が無意識に選択してき
た真実のかたちという自分
の無（意識）であり、本当
に自分には終わらない唯一

の無意識が与えられており、
あなたが苦しみをもって暗
示というかたちとして無も
有（空間）も永遠を唯一の
無のかたちに超えられたの
ならば、今も超え続けてい
ますが、それはみなにとっ
ての意識の助けであり、誰
しも正しく望むのならば、
その先には今までと、これ
からの自分に応じた正しい

無（永遠）というかたちが
あると申し上げられます。
つまり、自分の意識の心が
けで、自分の意識の循環を
決めることができます。人
間にたとえるのならば、肉
体として生まれて無、自分
の思いと行為にもとづいた
正しさの限界を迎えて死す
るのではなく、全無の法則
にもとづいていれば、生ま

れたら生まれたただけでその
ままどんどん成長し、そし
て、その自分は肉体を超え、
新しく進化したかたちに存
在としてあり続けることが
できます。暗示、意識は永
遠という構造であり限りが
ないことから、これは絶対
に達成可能なことだと申し
上げられます。私の知って
いる知識として、申し上げ

ますと、以前の物理では、地球の空間宇宙の波長の場所は波長1の場所であり、その上が波長5、その上が波長10で、存在とは意識の正しい密度が濃くなっていくたびに、その存在の意識体の波長の状態が変わり、そして、存在はその波長に応じて自分の住む場所も変わっていましたが、そして、

無意識の記録では波長 5 の場所がアストラル体（星幽体）、波長 10 の場所がケドウン体だったとお思いますが、今では存在全員が全無体であり、存在とはその自分に与えられている全無の意識の程度にもとづいて、これも存在全員による無意識の役割の選択のし合いですが、その意識の内

容や状態、構成、そして住む波長の場所が決められることだと申し上げます。全無にも様々な世界がありますから、たとえ人間として死するとしても、それはあなたが次々生まれてくる新しい命と自分の住む世界を無意識で交代し合いっこしていることだと申し上げます。あっちに住みた

い、こっちに住みたい、ホントです。

生きていく上で、無の考え方としてもう一つ申し上げさせていただけますと、ある意味は自分が、この世界で無より発生より自覚として与えられた様々な抵抗（身体など）や無（この世界で正しいとわかること）を、

自分の意志で、いいことに
しろ、悪いことにしろ選択
してきた部分は、それは、
その、完全に自分の責任で
ある分は自分自身の苦しみ
として抱えることが、これ
は私もですが、相手のせい
にしないことが得、正しい
ことだと、もっとわかりや
すく申し上げますと、この
無の世界で自分の責任だけ

で、自分の責任だけにおいて、全員全無の意識なのですが、それは、個人個人（個存在）によって様々な正しさにおける違いがあり、自分は自分になることしかできず、相手になることはできず、相手に何か、羨ましいことがあるとしても、それは、相手はただ単に相手に応じていただけであり、

そこに思うことは、あなたは必ず全無なのですから、相手に対する正しい尊重と、称賛、そして、世界から尊く感じるもの、それを参考にして自分の生き方を決めるということです。意識とは自分という土台がなければ何者になっても意味が無いのであり、相手になるとするのならそこに自分はい

ないのであり、それは求め
でも何でもなく、従って、
必ず求めることは今の自分
をベースに考えることが大
切で、つまり、そうである
ならば、誰かが何かか何か
に優れているとしても、そ
れは全然、羨ましくても、
嫉妬したり妬んだりする必
要なく、そうしてしまうこ
とは自分が求めていること

を否定していることであり、
つまり、相手ではなく、自
分は自分だけの者になるこ
とが大切であり、それは必
ず自分だけの波長であり、
この世界で生きていく上で、
自分が何かに尊く感じたの
であれば、それは自分が感
じたままに、自分なりの自
分を目指し続けていけばい
いと申し上げられます。ま

た、それは必ずあなたの求めであり、そして、物理上それ以上のあなたに対する愛はないということです。あなたは唯一の無でありそれは永遠です。唯一の無はふえ続けています。それは無意識ですから、それは永遠のスピードでふえ続けることによってあなたの意識を助ける元にもなっています

す。あなたの意識をどんどん密度化し、あなたの意識をどんどん永遠にしています。新しく進化。そしてそのふえ続ける唯一の無もどんどん時間に影響されないかたちでその意識を永遠化しています。それは物凄いスピードです。ありとあらゆるものの唯一の無の密度は物凄いスピー

ドでふえ続けていっています。この世界では相手は正しく尊重することです。正しい相手は称賛し、認め、そして、自分も自分ができる正しい与えをこの世界で行うことです。社会での役割を欺瞞がなくこなし、その自分の立場を永遠の自覚であるとの目線で見、相手も永遠の自覚であること

を意識することです。そう
していくことが今の自分
にとって、今の社会に世界
にとって何が必要なことか、
わかる元になります。そう
していれば、当然自分の意
識に感じるものも自分の意
識に応じたどんどんとした
正しいものになってきま
すので、感じるものが正け
れば、それは当然あなたの

意識が目指すものも、より波長が高いことに変わることになります。

みんな全無、しかしそれは、その意識の状態はみなさんの本当の意識の選択に応じていて、無意識には実は様々な果てしない色々な幸せの世界があるのであり、また様々な役割があり、た

たとえば今この地球に住む人間の世界で誰かの見た目の意識に自分が及ばないとしても、（私なんかは、全然見た目にはただのお兄ちゃんです。）それも必ず役割であり、しかしそのことを無意識にしか知らないことによって、その比較に存在は色々なことを思えるのであり、希望や愛はそういった抵抗

差から生まれるのであり、
今あるあなたの状態は、今
あるあなたの状態をもって
これからも含めて完璧な愛
だと申し上げられます。た
とえば自分がこれからいつ
か身体などの抵抗を失うと
しても、それは、そういう
かたちになるからこそ自分
の本当の自覚は守られるの
であり、しかもそれは必ず

自分の無意識で自分が本当に望んでいることを選択していて、実はその自分は、本当は無意識にある別の世界が本当に自分がその自覚が欲しいから選択しているのであり、その抵抗の移り変わりがあつたとしても、それは必ず自分が本当が行きたいところに自分を選択しているだけであり、全無

の意識とは存在その誰にも
平等に与えられており、た
とえば表層意識で肉体で自
分は過ごしたいと思ってい
たとしても、あなたの無意
識の判断は本当に永遠です
ので、それは本当は楽しく
ない苦しい道であったりし
て、肉体の移り変わりはそ
れは本当にあなたが望んで
いる場合しかあり得ず、そ

れはみんなで循環に必要な
苦しみの状態を選択し合っ
ているだけであり、要する
に、人間として食べ物を食
べたり、飲み物を飲んだり
して、循環代謝、新しく進
化しながら過ごしていく生
き方もあるとするなら、肉
体として一旦死して、また
無意識にある果てしない色
んな世界のどこかに自分の

自覚が生まれるかたちで当てられることも、それも無はふえる正だけでしかないことから、そのあなたも必ず無に平等フェアに新しく進化させられているあなただと申し上げられます。つまり、この世界は地球だけでなく様々な世界があり、それは当然、みながお互いそれぞれ無意識の中です承

の上でその役割を選択し合うことから、つまり、存在とは全員が全員地球だけに住むことはできず、様々なところへ行くことがあなたにとってのみんなにとっての、必ず最大の愛であることから、そもそもそれは、必ず自分が、自分の本当の意識が選択していることであるわけですから、今回た

たとえば地球に住むことが及ばなかったとしても、そもそも永遠という目線で見れば、地球に永遠住む人、存在は、まず以って私も含めて見られないことだと思えますから、今回たとえば、肉体などの抵抗を失って地球に住むことができなくなるとしても、それは必ず自分の本当の望みへ向かって

いることですから、悲観する必要は無いことだと申し上げられます。意識と必ず自分が積んだ抵抗、意識の内容、状態、詳細にもとづいて、無意識下ではみんなと比べ合ってみんなにとって最大の愛になるようにして、意識とは限りなくその住む世界の波長の場所が決められます。それはこれか

らも、変わりがありません。

あなたは必ず全無ですが、その無意識下で他の全無との意識との遣り取りで、地球という星における存在の立場を入れ替わることがあり、当然地球には、どこの世界でもそうなのですが、物理における適切な意識状態というのが必ずあります

から、その中で、今これをお読みになっているあなたは、その自分の無意識はいつも全存在の無意識の全体記録と繋がっていることから、そのお互いの気持ちの遣り取りの中で、自分は今回地球という星における存在の立場を他の世界に住む存在に譲ることがあるわけです。これは単純な交換で

はなく、A が B へ B が C へ
C が D へ・・・というかた
ちでこの世界もまたふえ続
けるだけの世界であること
から、この組み合わせには、
果てしがありません。意識
の場所とは限りがないとい
うことです。今もふえ続け
ています。よろしいでしょ
うか。これは、絶対愛です。
普通に考えてみてください。

無の密度が粗ければ粗いほど存在というのは、目に見える場所でその自覚を送らなくてはいけなくなります。普通に考えますと、空気や水や食べ物などの主体側の自覚に自分になるわけです。しかし、無の密度が高くなることはそれは当然、自分の自覚は空気や水や食物などの主体側ではなく、その

中のもっと密度が高い唯一の無の無い、無い、無い、無い、の密度の中の存在として自分の自覚は守られ、そして、空気や水や食物などの自覚は唯一の無の集中力によってその自覚の構成が保たれ、その集中のしかたがそのまま空気や水や食べ物にとって必要な意識をあらわし、まずどこも唯一

の無によってその自覚の構成がされているのですが、無の密度が高くなることはそのまま、あなたの自覚の過ごし方がどんどん正しく楽に幸せなものになってくるといえることです。

その中で選択として、他のふえる生命のふえる永遠のために全無によって、全

無に帰せられることによっ
て、あなたも全無なのですが、
そうして自分の無意識
に自分を永遠無に帰せられ、
循環などで他の生命の何か
を生かす側に使われるとし
ても、まずこれは、全員唯
一の無意識である以上、他
の生命の何かを生かす側に
使われていないことはあり
えないのですが、つまり、

あなたは、自動で、ふえる
生命のふえる永遠を行って
おり、それも本当にみんな
同士に感謝に当たることで
あり、それで今回自分が別
の世界へ行くとしても、そ
れは自分はただ単に人間で
あれば人間とは違う、違う
生命体に自分はなっただけ
であり、それからも自分の
永遠の自覚はその意識の選

扱にずーっと続いていくのであり、この世界はどう選択していても自分の自覚はだんだんと無に発展したものに変わっていきますので、つまり、どんどん自分は無、全無というプラスのふえた正しく感じる意識の行為しかできなくなってくることから、もし自分が循環に使われる側になったとしても、

それは法則に応じたものであり、きっとあなたにとってそれは楽しいことであり、そして必ずあなたが選択したことであり、それは必ず自分以外の相手のためなのだから、それはふえる永遠あなたを生かす元で、それを思える自分に、喜びを思える自分がそこにいると申し上げられます。全無とは

その思いに一瞬に、いつでもどこでも全無の愛とは最大にあり、その全無の動きはいつでも常に全員をもっとさらなる全無に導く働きなのですが、またみなが全員限りが無い全無になり続けることが全無、その思いなのですが、「死ぬのが当たり前」くらいに理解されている今の社会では、この暗示のこ

とを知った分だけ次の自覚に助かった、儲かったという気持ちでいいのかもしれませんが。ただ結論は待ってください。これから、みなさんの意識の心がけで、いったいどうこの世界が変わるのか、それをこれから、みなさんで一緒に見届けましょう。みなさんにわかっていただきたいのは、苦し

みとは決して終わらないもの、自分のために相手のために積み続けるものだということ。ただ、苦しみとは、正しく積みば積むほどそのことを何とも思わなくなる、執着に思わなくなる性質を持っていますので、苦しみとは全無ですから、もっと自分が全く無くなることですから、その部分が、

つまり、積んだ苦しみの何とも思わない部分が自分にとっての感じる部分であり、感じる量であり、つまり、わかりやすく申し上げますと、苦しみという抵抗を100自分が積んだとしますと、それを全無、何とも思わないことは、それは無の世界において尊い意識あるので、それはそのままそっ

くり100分の正、プラスの電荷を自分が抱えるということです。つまり、無いのに有る分の正しい抵抗が、自分が感じる意識になるということです。それが、自分にとっての無であり、暗示とは限りない与え愛でもあります。自分の無意識が相手でもあります。今までの自分を見返して、今ま

での自分の波長はどうだったか、そしてこれから、自分はこういった自分になりたいのか。正しいだけではつまらないという方、本当は正しいこととは楽しいことと幸せなことではかありません。それがそう思えなかったのは、みな自分の自由は許すが、相手の自由は本音として中々許さなかった

ということですが。しかしこれは当たり前のことであり、憎しみの排除はこれからもずーっと続き、その中で相手の自由は見極められ続け、今まで役割としてわざと無意識では（愛）無と違うことをしてきた分だけは、それは何度も申し上げますが愛を達成させるために必要不可欠な出来事であり、そ

れはこれから自分が憎しみ
や苦しみの出来事を我慢し
ていることによってだんだ
んと解消されてきます。そ
うしてどんどんこの世界が
無の世界に発展していけば、
みんなはお互いお互いを信
用し合い、お互いがお互い
の自由を許せる社会になっ
てきます。物事は波長、全
ては正しい抵抗に必ず応じ

ますので、何かの出来事があつたとしても、たとえば、誰かが自由に動いているとしても、何かに優れているとしても、その相手が正しいのであれば、それは許せるあなたが正しいのであり、必ず、自分にとって正しい受け取り方の意味があるのであり、そこに、意識の成長があるのであり、それは

相手を必ず正しいかたちで許すことによって、そこに自己の発達を促すようにしてください。自分がしたい自由を、自分が求める性質の自由の抵抗を積んでいくようにしてください。

正しさの抵抗分相手が自由に動いていることを嫉妬してしまう場合は、(芸能人

とか) それは、自分に全ての自由が許された時その自分は何でも求めてしまうという思いがその意識の根底にあるからであり、相手を自分の意識感覚で見えてしまう、判断してしまいうからであり、それは嫉妬も含めてあなたには最終的に愛になるいい抵抗であり、全無という抵抗は果てしないこと

によって、ここで完璧という部分が無いことによって、もちろんこれは終わりが無いものでありますが、無、苦しきによって相手の気持ちを思いやる自制心をそこで養われています。この世界は面白くて相手を疑うとその無意識の反応が最小のかたちになって相手になって現れるのであり、もちろ

んまだこの世界は完全に何もかもを信用していい世界ではありませんが、だんだんと無はますことから、実は無における抵抗の動きというのはその者が無いだけの意味が必ずあり、みなこの世界において全員無いは無いのですが、それには無より発生より自分が役割としてこなしてきたその意識

の現在表面に見える無意識
に対して平等フェアな無い
が与えられていて、本当に
意識が、自分が望んだ、自
分が努力したかたちによっ
て無いものは、相手が正し
く遊んでいることを何とも
思わないということです。
暗示というのはその全無の
意識でみなを意識を助けて
もいますが、その一方では

暗示（重力による意識の自由の抑え）を取り払った場合、その者は本音で何をするか
の波長も正確に取っています。つまり、それは、その者が、この無の世界で自分の力だけでみんなに認められる、自分で養った正しいという自覚の量で、この場合は、無意識にとっては、相手に駄目としている

ことが自分にとってのルールとなりますので、また、自分にとって認される行為というのは、本当は自分自身だけで積んだ正しさの量に応じていますので、今現在の無意識の物理における行動のルールというのは、憎しみは今やっと終わったばかりですから、大変に厳しいものだと申し上げられ

ます。ただ、物事というのは必ず抵抗に応じていますので、あなたが無、全てにとって正しいことを淡々と積んでいったら、それはいつか自分に返る正しい自覚となります。ですので、これからみなさんでこの世界の正しいかたちを模索していきましょう。それを、思い、行為としてあらわして

い き ま し ょ う 。

また補足ですが、暗示の
限りなき愛のところにつけ
込んで自分に憎しみをいつ
までも許している場合は、
いつか必ず自分の無意識に
よって罰せられますので、
つまりこの世界は永遠死と
いう絶対負荷とそれによっ
て生まれる絶対プラスによ

って成り立つ世界であることが明確にわかったことですから、過去の憎しみとなくなってしまった光を、無の愛として意識に解釈、解消するため起こる苦しみや出来事を余りにも自分の自覚の選択で、責任で、踏み越えていってしまうと、その部分の自分は何かのかたちで自覚を消されるかたちに

なりますので気をつけてください。あなたの唯一の無は永遠です。しかし、みんなで駄目としていること、法則外のことを無理やり自分で選択していったらと、物理はその一人だけを基準に回っているわけではありませんので、それは、その行為は、当然無にとってはその意識構成として、

誰もしてはいけないという
暗示にはなるのですが、そ
れはやはり、その相手の本
当の波長に応じたものが、
その相手へそのまま意識の
現象としてミラーとして返
されるので気をつけてくだ
さい。時間に影響されない
与えの時点で、そこを裏切
って行ってしまうと、他の
ふえる生命とふえる永遠の

意識に悪い影響を与えるか
たちにもなりかねませんの
で、いつもどこにも働く唯
一の無の無、正しいことを
行うために必要な抵抗と正
しいことを理解するために
必要な意識はこれ以上無い
与えで、これ以上は無も与
えることができず、あなた
も今以上はできないと思
い致しますが、もちろん無

の集中力は時間に影響されないかたちで強していく傾向にあるのですが、存在とは私たち地球の存在だけではなく、この地球含めた空間宇宙全体や、そこの空間一見何も無いようなところにある永遠に続く唯一の無の密度の世界の存在の方が遥かにその数が多いので、当然存在の物理のあれして

いい、これしていい、のルールはその全体の全存在の思いと行為によってその正しさを正確に無意識に量られ決められます。ですので、この、いつもどこにも働く唯一の無、自分自身、自分の生命の根拠を恨んだりすることが無いように気をつけてください。あつたとしても、それは必ずあなたが

何かに自分の役割を交代することを無意識で了承することです。必ず発生するのは愛です。

それでは、まず、3では無の原則論をお話ししましたが、実践論をお話ししたいと思います。主なテーマは、空間空気のあっちも悪ければこっちも悪いです。みなさんは普段暮らしてい

る中で、自分の考えや自分の動きというのは、それは全て本当に自分だけの意志によって成り立っているとお思いいたしますか。実はそれは違います。この世界は唯一の無でできていて、その密度は果てしなく、そして、そこにある全ての無は隙間なく繋がっていると何度も申し上げました。つ

まり、あなたの身体も果て
しない唯一の無の密度に支
えられていて、その無には
隙間が無く、絶えず時間の
経過に動き、そして、人間
の頭や身体はそのまま空間
と繋がっていますので、あ
なたも実は一見自分の意志
だけで物を考え、動いてい
るように自分を感じますが、
実はそうではなく、人間に

限らず、他の物も含めた存在も、自分で自分の意識の選択という側面を持ちながら、ある一方ではこの無の世界における無の流れの動きに何か自分を喚起、促されて動いている部分があります。もちろんこの唯一の無の世界の大原則は、有（動いても）無（じっとしていても）どちらも今現在の

永遠の集中力を以っていつもどこでも無く（一瞬前の今までの全てのプラスの電荷を永遠乗に超えたプラスの電荷）の正が働き続けているのですが、それは同時に、その中において全員全存在のその意識には、一人一人（一存在）には、無の全ての意識が働いています。映画でありました。実はこの

世界は何かの数学的なものに支配されていると。それは事実なのですが、それは限られたものでなく永遠で、実はこの世界はああいった何か、そこの中の物から搾取して継続する世界ではなく、たとえますと、無いものから何かを奪うことは、無いものから何かを奪うことはできず、有るものはみ

なさんが普段から無意識に波長を合わせておくことによって、そこに発生する正しい集中力によって時間の経過に自然にふえてくるものであり、そこではただ、無に自分は待てばいいのであり、変わって、有るものから何かを奪う、もしくは与えてもらうことは、有るそれには必ず無いという根

抛があり、有るものは、有る分だけの限界を必ず持つていて、有るものから何かを奪う、もしくは与えてもらったとしても、それは与える者とふえる相対との関係から、必ずそこには与えるという行為とただもらうというその関係の場合には、そのお互いの無意識に不公平な抵抗や憎しみが発生し、

それは尊くないことであり
ますから、つまり、有るも
のから何かを奪う、もしくは
は与えてもらおうとしても、
それが限りがあるものであ
れば、それはふえる相対に
よって意識が尽きることで
ありますから、要するに時
間はズーっと流れており、
その中で存在とは常に意識
を必要としていることから、

有るものから与えてもらう
としても、それが限りがあ
るものであれば、もしくは、
与える方ともらう方がいつ
も変わらないのであれば、
そこには必ず不公平な抵抗
が発生することであるから、
それは無と言えず、無と言
えないということは、みん
なの求めとされないという
ことで、その意識は、つま

り、物理構造として続かず、
この世界は存在それぞれが、
現在無の無いという全く無
いという意識に、思いや行
為が法則に沿った分だけが、
この全く無いという意識だ
けしか、この世界ではプラ
スを生み続けることができ
ないと申し上げられます。
つまり、与えたら与え返す、
時間によって与えられるも

のを大切に作る、時間は人の命や物質を作り、この空間世界を作る元でありますから、この普段の無意識の繰り返しのないという正しい意識こそ、この世界は永遠に終わらないかたちでプラスを生き続けていくことができる世界だと申し上げます。要するに私が申し上げたいのは、私たちの

普段の無いという正しく相手を尊重し、自分が生きていることが他の誰かのためになる、そういった心配りが普段から必要であるということ。これは単にこの言葉を取るのではなく、無には深い永い意味がありますから、つまりその中ではあなたは、今ある状況も尊重した、ただ普通に自分

を暮らしていけば、気づけば自然とさらなる無意識の自分になっていることと申し上げられます。これは悪いかたちも含めて、苦しいかたちも含めて、寂れたかたちも含めて、賑やかなかたちも含めて、今みなさんがそれぞれ自分のある状況の中で、永い目で見たくいと永遠無意識、そんな自分

を想い描いていけたら、大体はそんな感じで、今ある自分を、自分が望める範囲で、ただ淡々と自分送れる生き方が必ずあなたにとっての正しい永遠に繋がります。

この世界は現在の無によって存在どの誰にも永遠のスピードで密度化し続ける

唯一の無意識が与えられ続け、それは全無の意識であり、その密度はこれからも高まるばかりですが、この、もちろんこの意識の追求には終わりが無いのですが、全く無い意識同士の集まりですと、この世界は莫大にその意識分、その意識のスピードで、正しい物質、エネルギー、心などは、ふえ

続けます。これは今既にな
っています。これから上が
り続けるばかりです。もち
ろんその中では、自分の唯
一の無意識を見極めるのを
忘れないでください。無よ
り発生より、もちろん、無
意識のことなので、覚えて
ないことの方が多いと思い
ますが、今、たとえば人間
として暮らしていて、自分

に対して与えられる愛はどれぐらいのものが適切であるのか、相手にはどういった自分であることが正しいのか。そういったことを冷静に自分の意識で感覚的に正確につかめるようになってください。無はいつもどこでもそのプラスの全てを更新し続けています。それは必ずあなたであり、それ

は永遠のスピードで逆らえず、人や存在は必ずどう動いていっても、必ずそのどこも唯一の無の密度の世界は、必ずこの唯一の無の密度の意識の集中力に応じたプラスの世界のかたちにしかならざるを得ません。そういう意味ではとても安心していい世界なのですが、それだけではなく、私にな

ぜこのことを述べさして
ただいたのかと申し上げま
すと、たとえば、外で歩い
ていて車が目の前を通りま
す。それは、暗示です。風
があなたの身体を触ってい
くのも、それも全て暗示で
す。目に見えるもの、身体
に感じるもの、それは全て
あなたを無、永遠に導くた
めの暗示だということです。

ここで気をつけて欲しいことが一つあります。それは、あなたが意識を持っているように、この世界のどこも何でもどれでもどの密度でも意識を持っていて、それらは全て当然正しいかたち
にしか全員動けないのですが、100人いたら100通りの意識、波長があるように、実はこの世界は永遠

の存在数が永遠にふえながらその意識の生活を送っている世界なのです。つまり、あなたが動くことはそのまま全てへの作用になりますし、逆に風や空気が動くことは、それはそのままあなたを動かす作用となっているということなんです。気をつけていただきたいのはただ一点です。自分が何と

なく腹が立ってくるような時、それは本当に自分の怒りだと思えますか。憎しみは、自分に正しい苦しみが足りないから起こるのであって、自分がちゃんと、正しい抵抗を積んでいれば、それは自然と自分に発生しなくなってくるものであるのです。また、この空間空気の世界で何かの理不尽が

あった場合、それは無の連絡となつてあなたの意識に影響を与え、つまり、私が申し上げたいのは、この空気などの自分以外相手の抵抗に押されて無意識に自分が怒ってしまうことを気づいてくださいということです。これは本当の話で、人間に感情の起伏があるのならば、それは当然この世界

の波長の起伏と一致していて、それは唯一の無の密度の世界であることから、そして、その空気というのは、その認識形態からどう人間の頭に空気を当てればその人間が怒るかをよく知っています。ホントなんです。もちろん空気も自分の永遠が大事なので、人に悪さすることはまずあまりありま

せん、または、できませんが、私が申し上げたいのは、この自分が怒る、自分に憎しみが湧くというのは、それは自分以外の何かの抵抗に押されてなっている場合が多いということです。これは人がいい方に多く、一見心が広いことから、相手の憎しみに敏感に反応してしまい、つまり、相手の憎

しみを自分の意識に映した
時に変に優しい方は自分も
それを怒ることによって、
相手の憎しみの無における
損害の程度を自分も怒ること
によって緩和しようとし
ます。憎しみの分け合い。
これは本当にとってももった
いない現象で、この空間や
空気などから自分が何かに
触発されて怒ってしまい、

憎しみを持ってしまい、そのことによって何かを失ってしまうことは大変に自分にとって損失であるので、知らないよりは知っていた方が、怒りや憎しみには自分じゃない部分があることに気づいていただけることはこれからのみなさんにとっても、良いことであると思ってお話しさせていただけ

きました。そういった空間
や空気などの自分にもたら
す暗示を知ったことで自分
の人生に変化が起きたとし
ても、それはあなたの意識
の向上をあらわすので、必
ず前向きに捉えてくださ
いますようお願い申し上げ
ます。なお注釈ですが無は無
(空間の無いところ)でも、
有(空間のあるところ)で

もその意識は永遠を超えて
現在の時間に空間に影響さ
れないかたちでいつもどこ
でも唯一の無の集中力は働
くことから、働くかたちにな
ったことから、存在はそ
れだけ自由な選択肢の中で
それだけの広い心の中で正
しさを選び取っていけると
いうことです。必ずいつか
わかる時が来ます。正しさ

とはつまらないことでは無い。また、苦しみには当たるものの、何とも思うことでは無い、さして普段の自分の生き方とはそれほど唯一の無とはかけ離れてはいない。なぜなら、時間は永遠あるのだから。波長は本当にちよつとの心がけで全くその内容が変わってしまいます。みなさんこのこと

を忘れずにいてください。
自分が怒ることは、憎しみを
持つことは、必ずみんな
に迷惑を掛けていることを
忘れないでください。

ここで、もう少し空気と
人間における抵抗と認識に
ついてお話ししておきます
と、人間の意識、普段の思
いや行為は無より発生より

今まであなたの正しい学びに必要なのに、時間の経過に今現在は肉体という抵抗についてきて、そのあなたの意識は当然今までのあなたの意識の蓄積をあらゆる脳や身体などの影響を受けていますが、その肉体に対し、空気の方が、唯一の無という意味では一緒ですが、役割として遥かに空気

の方が密度が濃いので、空気のある特定の意志を持った、ああ押せば、こうなる、そしてその結果はこれに繋がる、空間にある空気は実はそのくらいはわかっている、それをわかった上であなたの頭や肉体を空気は抵抗で押すことがあるので、気をつけてください。本当にいたずらするんです。た

まに。あなたのそれ、怒り
や憎しみは本当にそれが自
分のものなのか、一遍よく
考えてみる必要があります。
つまり、この世界は永遠の
世界ですので、相手を恣意、
わがままに動かそうとする
ことは損なのですが、それ
でもわかってなおかつ空気
は何かの必要でそれをする
ことがあります。つまり、

人間の意識に限らず全ての意識は化学反応の連続で成り立っていますので、いくらそれが悪い行為と言っても、それも永い目で見た何かの永遠の意味がありますので、つまり、あなたも空気に抵抗を当てられると気持ちが変わってしまいますので、それ本当に自分の気持ちなのか、ということ

確かめるようにしてください。ちなみに物理上は、相手に今申し上げましたような空気などの恣意、わがままな相手をコントロールしようとするような抵抗や、何かの電波を飛ばして相手の気持ちをコントロールすることは違法とされています。もっとわかりやすく申し上げますと、テレビも外

にある看板も、歩く道路から、空間に環境まで全て何もかも暗示です。目で見ただもの、身体で感じたものは、そのままあなたの心の状態を作るんです。あなたの身体の状態は必ずこの世界の構成に沿ったものでしょう。ですから人間として生きていけるんです。つまり、あなたの身体も含めた意識状

態は必ずこの世界の影響を受けているということです。存在の意識とは見た感じのままにその意識を作る特徴があり、しかしここには、いちばん密度の高い波長として唯一の無意識、つまり、いちばん正しい波長が働いていますので、物理上はいったいどんな方法を使っても、恣意、わがままに人や

誰か存在の意識を悪くコントロールすることは絶対にできませんのでご安心ください。無波長の特徴を申し上げますと、無はふえる永遠という性質を持っていますので、永遠という限りないものがふえるということは、つまり、その中で、恣意、わがままな思いや行為を相手に押し付けようとし

ますと、それは、必ず結果を以って恣意、わがままをしようとした相手はなぜか自覚を制限されるかたちになり、そして、その相手の方はなぜか正しい自由がふえます。これは暗示の面白い仕組みで、プラス以外の行為は全て逆に返ってしまうということです。マイナスをしようとするとな自分が

マイナスになり、相手にプラスが行きます、自分がプラスをすると自分も相手もプラスがふえる、存在は絶対にこの全無の法則から逃れられません。ですので、まず安心していいことなのですが、過去に、今でもたまたまにあることですので、お話しさせていただきました。何か大切なことがある時は、

もしくは、何か嫌なことがある時には、その時の空気の状態をよく見極めてください。振動して連動していきます。あなたや周りの意識と。人間がこの世界をうまくコントロールしたいと思っているように、空気も実は同じことを思っています。こういったことを知ることにも経過の必然であり、そう

することが人間にとっても、
空気にとっても、他の存在
にとっても、自分の意識を
良く見極めるために良いこ
とであると思ってお話しさ
せていただきました。また、
人間は脳や身体など特有の
抵抗に支配された意識を持
っていますが、これは人間
特有の知恵でもあり、逆に
空気は人間が持ち合わせな

い、永い目線の認識力を持ちますが、人間のような肉体のような抵抗に制限される上で生まれる認識力は持っていないということです。これはどちらも一長一短であり、物理はその存在それぞれの選択に対し、必要な、IQ、意識を与えますので、これも全て、物理の抵抗と認識の必然と申し上げられ

ます。意識とは存在同士に
主体と客観の違いがあるた
めに、完全な相手のコント
ロールは不可能、ましてや
それが正しいことでなけれ
ば、逆に返ってもっと正し
いことに出してしまうとい
うことです。意識は必ず正に
しかなれません。

また、3の補足ですが、

いつもどこでも働く唯一の
無より与え続けられている
無（自分がこの世界で無に
与えられている無を無と貸
借無しの状態にするために、
…全無なので、無いのと一
緒です。正しいことをすれ
ば、逆に無はふえています。
そこを分かった上で自分自
身がさらなる全無という意
識になるために必要な苦し

みという真実) は、当然 1
00 人いたら 100 通り与
えられる苦しみや意識、そ
の内容が違い、それは、自
分が今まで無より発生より
取ってきた思いや行為の蓄
積された無意識や、その無
意識にもとづいた現在の抵
抗のかたちの(身体など)
の意識の記録に応じますの
で、また、そのいつもどこ

でも働く唯一の無より与え続けられている無は、これからの普段の自分の心がけ次第で、その与えられているものの意味や内容が変わってしまいます。つまり、このことが指すことは、自分に起こる出来事を全て正しく捉えていかないと、それは自分にとってプラスの意識とはならないというこ

とです。最終的にはなりませんが、目先で損をするということ。物事は時間に必ず無によってプラスにはされるものの、自分で進んでプラスを掴んだか、無によってプラスにされたかでは、その意識状態に変化が出てくるということです。暗示というのはその思いに行為に一瞬に応じる（その

思いや願いを認識としてか
たちにすること) という性
質も持っていますが、それ
は当然その思いや願いが叶
うかは、それは当然今まで
自分が蓄積してきた無意識
やそれにもとづいた身体な
どの抵抗に応じていますの
で、その内容は正しいこと
が必要で、逆に申し上げます
すと、全てにとって永遠正

しいことであればそれは必ず叶う時間が来ることであり、ここに無に思いを持たれる方は、その自分の願いが叶う時間まで辛抱強く待ってください。また、自分は、今まで自分は役割として正しいことでは無いことをしてきたという自覚がある方で、その無意識の蓄積や現在の身体などの抵抗の

悪い部分を一瞬に解消したいと思われる場合、それは必ずあなたの波長を無が正確に読み取って、あなたがいちばん早くいちばん正しくいちばん苦しくないかたちであなたに苦しみを出来事として、もしくは自らの心が発起されるかたちに自分は正しいことを促されませんが、悪い部分を一瞬に解

消するにはそれなりの苦しみが伴うことを承知しておいてください。ただ、無は正確ですので、あなたがどれくらい本気なのか、どれくらいまで耐えられるのか、どれくらいの出来事が必要なのか、まで全て完璧にあなたの永遠先まで見抜いていますので、このことを理解した上で正しいことを思

う場合は思ってください。
これは何のことを指すのか
と申し上げますと、この意
識の世界で思うということ
は正しいことでも悪いこと
でもそれは全てとてつもな
い波長で取られているとい
うことです。つまり、以っ
て申し上げさせていただけ
ますと、この世界はその一
瞬一瞬が全て正しさの勝負

だということ。ちなみに憎しみは正しさに対し、一分の力も与えられていません。くれぐれもみなさんに気をつけていただきたいのは、無というのは全愛を強していく構造であります。が、その普段のみなさんの全愛に助けられてのあなただけではなく、それを取り除いたあなたの抵抗で培っ

てきた本心が出している波長にも正確に反応し、これは、あなたが正しいことに進む場合はあなたは当然の正しさの量に応じた全愛に助けられながらその意識の成長を促されますが、変わって一転、悪いことを自分が選択した場合、当然それはみんなのためでは無いので、その波長は全愛に助け

られることなく、物理的に
波長が引っかからないので、
注釈ですが、みんなには自
分が含まれますが、憎しみ
はその自分自体が自分より
悪い意味でもっと無しとい
うかたちでありますので、
つまり、みんなのために、
憎しみの瞬間の自分はみん
なに意識として含まれない、
しかしそうすることによっ

て、この世界はどんどん憎しみが無くなってきたと申し上げられます。その場合はあなたの本心の悪いところだけを永遠の波長で取られますので、憎しみというものにはくれぐれも気をつけてください。つまり、憎しみの部分は無意識の中で消されたという抵抗になることによって、その蓄積に、

どんどんその憎しみの行為が意識としてできなくなってきました、これも無の愛の働きです。あなたが普段から出している波長に無意識は正確に感応を起こし、それはあなたを取り巻く構成する意識（世界）のかたちとなります。わかりやすく申し上げますと、正しいことを選んでいくと自分の永

遠が意識がふえます。逆に正しくないことは、それはマイナス、何かが減っていく、永遠の何かが減っていくことを指します。本当はあくまで永遠は減らないのですが、意識の循環のしかたが苦しくなるということです。ここで、正しいことをしても中々目に見える現象として自分に幸せなこと

が現れてこないとしても、
それにはあなたの今までの
ことも必ず含まれています
ので、決してへこたれず、
暗示はしたらしただけは
確実に積み重なっています
ので、意識には（ものがか
たちになるのには）永遠か
かると思って自分の意識は
今世に限らず来世にも永遠
続くものですから、その自

分のために頑張ってください。
い。

そして無については、無は無のまま進んできたのであり、（これはあなたのことです）どんどん無くなることによってどんどん無いこと（正しいこと、この世界の環境）を与え続けてきたのであり、それは正しい苦

しみと正しい愛だけでこの世界は成立し得たのであり、また成立するのであり、今までそれと違う行為をしてしまう場合もありましたが、それは、この世界が無だけで成り立つことを証明するために必要なみんなにとっての苦しみだったのであり、そのことを、今まで自分が無（みんな）に助けられて

いた部分は、やはり、その自分の自覚の役割としての責任に応じたある程度は時間にもした同等の抵抗が自分に苦しみとしてかかることを了承しておいてください。憎しみの払い。この世界は実は愛と憎ではなく、愛と苦の世界で、そもそもこの世界は全無の世界であり、その暗示が答えとして

出したことは憎しみとはこれから敢えて行うべきみんなの学びとなる苦しみには当たらないということです。憎しみは憎しみを永遠に行わなくていいということを示した点についてプラスではあるものの、その点について全無であります。実際に存在が生きていくために必要な負荷、苦しみと愛、

プラスは全て永遠死の意識
で成り立っています。もち
ろん憎しみも全無でありま
すが、これからはわざと役
割でやる必要はあまり無く
なってきたということ
です。唯一の無が誰にも与
えられ、それはふえる生命
のふえる永遠のかたちでこ
の世界のどこにもどの密度
にも果てしなく働くかたち

で永遠に顕在化し続けると
いうことは、憎しみはこれ
から無くてもこの世界は発
展し続けるということです。
あくまであったとしても、
それは、過去からの、これ
からの時間の経過の中、存
在同士の間（苦しみ）の抵
抗差を調整するためであり、
それはあくまで結果を以つ
て必ず全ての出来事は愛に

帰せられることだと申し上げられます。世界では元々無でできていて、無がいちばん密度が高くて、その集中の経過の中で無は概念を変遷させてきたのであり、意識状態を進化させてきたのであり、それはそのままみんなが求めたことであり、それは言葉に表すのなら、存在たちはそれぞれ試行錯

誤して自分たちで色々な光のかたちを生き方を見つけ、その中でやってはいけないこととは何かを自分たちで共同に決まりにして、それが暗示になって今のこの世界の物理の意識の構成のルールになりました。そしてこれは、完全にみなさんの無意識で決められたことでもありますから、これからは

その法則に沿ってみんなが
生きていこうと、その気持ち
が現象としての暗示にな
りました。そして、世界は
無が苦しみに当たるのであ
り、無が無（愛や生命）を
生めるのであり、無、正し
いことだけがみんなが生き
ていくことができることか
ら、それ以外は無（みんな）
の何かの意識に悪く抵抗に

当たり、必ず無以外の行為は必ず誰かに迷惑がかかることですから、それはこの世界が無、ミラーの世界であることから、申し上げますと、憎しみ、それは、自分に返って自分の意識の何かの循環を苦しくしてしまうことだと申し上げます。これは、物理の数学的な考え方で、憎しみはその

憎しみの量だけ自分よりの
考えであることから、無、
いつもふえていく無、ふえ
ていくみんな、永遠とは真
逆の意識であり、あなたの
命はいつもどの一瞬もそれ
に支えられている中でそれ
を思うことは、その思った
時のみんなの意識の量と離
れた分だけの意識分、必ず
自分は自分の無意識のミラ

一によってその自分の意識の何かを必ず循環に消されてしまうということです。良く言えばあなたのプラスはふえています、そのふえている無意識に助けてもらった分は、それはいつか、自分が循環に何か別の物に交代することを了承していることかもしれません。つまり、結論から申し上げま

すと、憎しみとは無におけるその意識の判断は、自分のことだけを考えていることにも当たらない、無意識が時間に関係の無いかたちでふえている世界で憎しみを思えてしまうということは、それは、自分自身の意識が無よりも悪い意味で自分が無いことであるわけですから、それは自分の今回

の現世における自覚の生命を削ることを作ってしまうこと、であるということである。しかし、後から生まれ来るふえる無意識もこの地球の世界に生まれてきたいと思うものもいるわけですから、もしかしたらあなたは、その無意識の集中に押されて、仕方なしに、わざと、憎しみをその者のため

に行って、いいですよと、
地球での存在における順番
を代わってあげますよとい
う、人がいい反応かもしれ
ません。無には愛しか発生
しないことを考えますと、
まず以って発生する憎しみ
は、この順番の交代の遣り
取りを新しく生まれてくる
命に、何か愛おしいものを
感じて譲っていることだと

申し上げます。・・・循環の仕組みわかりましたでしょうか。暗示は出てからわかりますので、わかる時も必然だと思ってください。果たして、憎しみを思わないで自分を堅持するものと、何かわざと憎しみのような感じになってしまって、後の者に自分の役割を譲ってしまうこと、どちらが愛な

のでしょうか。どちらにしても必ず無であり、必然であり、つまり、この世界は、時間に影響されない無のスピードが働いているということは、存在とは結局、その思い、努力次第で、お互いがそれぞれその役割を無意識下で選択し合っていることと申し上げられます。ただ、ここでわかっていた

だきたいのは、役割とは交代する時になって苦しくて当たり前で、苦しいからこそあなたはそこに無、正しいことを思えるのであり、そうして存在全員は無に無の帳尻をいつも平等な抵抗のかたちに合わせてられることによって、その苦しみの先には必ずあなたには現在無の時間にふえた、プラス

の生命の自覚がまた待っているということなのです。

憎しみとは相対によって生まれるものですが、相対がなければ愛もまたなく、無の全てには必ず自分も含まれるということは、相手に対する自分の自覚の恣意、わがまま、または明らかな意図が無いと憎しみはしな

いということですが。ただ、
前記しましたように憎しみ
とはただ自分を役割として
殺すという尊い意味も含ま
れており、結局を以っては
全く自分の力の恣意、わが
ままを指しておらず、気づ
けばこんなにもったいない
ことは無いということですが。
以前に存在とは、生まれた
ら生まれたまま新しく進化

したかたちで生き続けていけることができると申し上げましたが、それはこの空間一見何も無いようなところにある常に永遠のスピードで発生し続ける唯一の無と関連があり、自分が抵抗を保って生きたければ、それは、次から次へ生まれ来る唯一の無意識に正しさで負けてはいけないという

ことです。この者たちが人間のような抵抗を持って生きたいと願うのであれば、それは必ず、あなたは自分も生かすが、相手の願いも平等に生かすかたちにこの世界へ貢献していかななくてはいけないということです。自分が生きていることが、この空間一見何も無いようなところから発生する唯一

の無意識と同じくらいのふ
える生命とふえる永遠とい
うみなを生かす意識であれ
ば、それはあなたは、自分
にも相手にもその今の自分
の抵抗を新しく進化させな
がら生きていくことができ
ると申し上げられます。た
だ、西暦2011年現在で
は、まだ人類は地球ですら
正しいかたちで征服できて

いませんので、つまり、存在の住む場所が限られていますので、これから、まず地球に優しいことをして、地球の寿命を発展させるかたちにして、(ちなみに地球も意識で、生き物です。) この世界の循環の構造を正しいものにし、それから、みなさんが正しい意識を持つことは、空間宇宙の

暗黒エネルギーがある程度は緩和されることを指しますので、暗黒エネルギーが緩和されますと、まず、一度暗示で進んでしまったものは単純には戻りませんが、もしかしたら、他の銀河や星の生命と連絡が取れるかもしれません。ただ、暗示で出ているのは、現在の暗黒エネルギーを取り払うこ

とはまず無理、不可能だそう
うです。一度できてしまっ
たものは後戻りできません。
そこから何かの正しい形態
に変わることはあります。
これもみなさんの意識の送
り方にもとづいています。
（暗黒エネルギーもそうい
った反重力を働かせること
によって、星や星同士の対
立を無くしたり、この空間

宇宙全体にあるありとあらゆる物質の愛の均衡状態を守っているため、つまり、私たちは普段、人類や地球を基準に物を考えがちですが、実は、この空間宇宙にはまだ能動的でない星や銀河がたくさんあり、そのものにとっては、何十億年か先にこの宇宙が再構成されることが、そのものにとっ

てのみんなを含めた平等フ
ェアな愛に当たるため、暗
黒エネルギーは一度発生し
た分は消えないそうです。
難しいそうです。あれも無
という意味では正しいエネ
ルギーだということです。
ですので、これからこの地
球でできることをみなさん
で意識して改善していきま
しょう。正しい前向きな意

識にみながなれば、それは必ずこの空間一見何も無いようなところから IQ 効果がもたらされますので、そのうち、解決策が見つかるかもしれません。そして、先程の循環の話ですが、人類はまだ地球に制限されている存在であることを考えますと、意識はふえる、それは、あなたをみなさんを

生かす元でもありますが、それが無ければ、あなたはみなさんは一秒も生きることができませんが、しかしそれは同時に、後から来る者の無の願いもふえることであり、そういった意味では、存在とはしばらくは、役割を循環に交代し合うこととしか、まず難しいこととかもかもしれません。尻下がりに

で、すみません↓ただ、何でもそうですが、意識は永遠であることを忘れないでください。今はまだわからなくても、これは必ず何か愛に繋がる物理の必然です。私も何か色々言われてしまう不利益なことは話さない方が得だと思うのですが、それは不誠実な感じがしますので、正直にお話ししま

した。ただ暗示は必ず無意識から出ることから、みなさんにとって必ずこれが最大の愛であることは、申し上げさせていただきます。

物理の世界では力の独り占めというのは、ふえるみんながいて平等フェアな世界である以上絶対ありえない、現象としても絶対に達

成できないことだということ
とは結論づきました。無は
力の全てであります、そ
れは生命の全てであり、そ
れをいつも全無、時間に関
係の無いかたちで全部自分
に自分無し、永遠死し続け
ることによってこの世界の
平等フェアを保っており、
それは全員唯一の無にバラ
ンスが取れており、無はい

つも全てであることから、
みなさんもいつも全て永遠
であり、それは意識のこ
とを指していて、このこ
とを、
みなが法則に気づかず
いちばんの無、力欲しが
ることを自分の苦しみ
として無は背負って
いたのですが、この世
界でいちばんと認めら
れるのは、自分に意
識がいちばん無い存在
であ

り、それは自分の意識を相手のためだけに究極に無くし続けている永遠死の意識であり、これは完全に意識の力の恣意やわがままとはかけ離れており、真逆であり、実は永遠に生命がふえ永遠に時間がふえる世界では、意識の力の恣意、わがまま、この現象とは物理的にありえない、起こせない

ことで、その逆、ふえるみんなのふえる永遠、これは唯一、恣意、の心とはかけ離れている思いと行為であることから、無はこれを時間の経過に無い、無い、無い、無い、と続け、無（空間の無いところ）有（空間のあるところ）で自身の苦しみが永遠というある一定の意識の単位を超えたこと

によって、相手の比較の憎しみを苦しみとして背負わなくてよくなりました。つまり、無が永遠を超えて有るというかたちにこの空間どこにもどの密度にも果てしなく働くかたちで顕在化したということとは、自分が無くなっていくことによって発生する意識を自分以外の相手に与え続けたことに

よって、かたちとして顕在
できたということは、自分
は相対の限界を超えたとい
うことであり、つまり、自
分は無いとするたび永遠を
生んでいたのですが、その
行為は無い、永遠の行為で
あることから、つまり、自
分と、自分の無いによって
発生した者との間には永遠
差の光の差があったのです

が、この場合つまり、無い
をした側が永遠に光り、そ
れによって発生した者は永
遠に感じる、しかし、ここ
には物理の重大なポイント
があり、つまり、無いは無
いとするたびに永遠乗に光
り続けていきますが、その
構造は全無であることから、
その無いはその光をどんど
ん自分に感じなくなってお

り、変わって、発生するものたちは、見た目は無の全てにその光の輝きは譲るものの、自分たちはいつも、その永遠の光を与えられ続け、そしてその永遠の光は、ずーっと相手のためだけに平等にされ続けていたことから、つまり、ここに、無の現象として発生することは、無はいつもいちばん光

るものの、それはあくまで
ふえる相手の生命のために、
無の無くなっていくしか構
造に無い苦しみと、相対の
この世界はどこも無の密度
であり、その意味では光自
分も無であり、その中で、
光も感じるという意味では
いつも全員（無）いちばん
光っていたのであり、そう
いった意味では、無が無く

なっていき、それによって
自分以外の相手に無と光を
与え続け、それが、時間に
影響されないかたちである
と無（全体記録）によって
判断され、その苦しみを以
って相対の限界を超えるこ
とと、光が次から出る光を
気にして、しかし、この光
は平等にされ続けていたの
であり、しかし、いちばん

光っているものは、実はいちばん感じていないことであり、光はそのことを必ず無意識で知っていたわけですから、無の無くなっていくその苦しみに自分が思いやりを持ち、自分が与えられた光を与え続ければ、それは自分は全無の行為であり、自分はそれによって正しいかたちで光始め、

それを全員が永遠続ければ、それは全員が全全無に相対の限界を永遠に超えることであるから、ここにわかることは、この無と光はどちらも無の世界において平等フェアなかたちであり、その上で、存在たちはどういった意識のかたちを選ぶのか、それは、無の無いの発生の当初より、存在たちは

その無意識でそのお互いの
行く末を相談し、了承し、
そうして出た結論は、最初
いきなり無は無いとして光
を生み、その光たちは無い
のたびに光を無い者に全無
し続ける、いきなり最初か
ら平等フェアな世界ではな
く、無は無い、いちばん光
る、しかしそれを感じてい
るのは他の全ての相手、こ

れは物理上は完全に平等フェアな状態ではありますが、その上において選択として、今光たちは目先に感じていく方を選ぶか、与えられた光を本当に無いものに与え続け、永遠に平等フェアな世界を続けるかでは、ここが実は物理の選択の分かれ目だったのでありますが、つまり、目先に感じていく方を存在

たちが選んだ場合、それは無意識の中で一旦、唯一の無を、つまり、正しさを譲ったことであり、しかしこれは、本当に無い者に対する、苦しみを譲ることによって、唯一の愛を取らせてやろうという結果を以って愛の働きだったのであり、しかし、光自分たちも無の無いことによって生まれる

光から比べると自分の光はいつも本当に無いものであり、実はそういった意味では感じている光たちも本当に無いものであったのであり、これは、その関連の中で、お互いの無がどういった無、苦しみを選択しているか、存在同士が無意識下で選択したことだと申し上げます。つまり、存在

は無の無いの当初より光を
本当に無いものに与え続け、
いきなり平等フェアな世界
にするのではなく、それは
通常考えにくく、そうであ
った場合は全員が平等な同
じ苦しみの抵抗の唯一の無
という意識状態になってい
たはずであります。それ
ではそこに学びが発生せず、
学びが発生しないうちから

完璧にみんなが正しいことを行うことは到底考えられず、まず時間の始まり当初そこには、概念の発達は無いことから、どこも唯一の無の密度がいちばん高いのでありますが、そこには相対もあることから、その無くなっていくいちばんと、光って感じていくいちばんとどちらを選択すると無意

識に聞かれた時に、単純に無の無いによって発生する光の自分は相対の全員が無に対し全無の行為をし続けるよりは、相対の全員の比べ合うことの憎しみの排除を役割として受け持つことを無意識に了承したのであり、これはまず、愛を行うためにはそれと違う意識を完全に排除する必要がある、

それがかつての光たちは無意識で了承して、自分たちは感じるいちばん、唯一になりたいという、役割としての憎しみを続け、そして、無は無いことを続け、そしてそれは時空を超え、現在唯一の無はこの世界のどこにもどの密度にも永遠のスピードで働き続けるかたちになり、そして、この世界

はどこも無意識で、つまり、
愛でしか構造ができていな
い以上、無の無いによって
生まれていた光たちの憎し
みはあくまで役割として恣
意、わがままな気持ちをこ
の世界から無くすために、
恣意、わがままな力の唯一
の法則をこの世界に構築さ
せないための、憎しみを行
っていただけであるから、

その憎しみは暗示上、物理上、その今現在の唯一の無意識の構造から、それはつまり、唯一の無意識はふえる永遠であるから、つまり、憎しみは、思う、行うことはそのまま思った、行った相手はこの永遠の世界で自分の意識の循環のしかたを苦しいかたちで相手に譲ることになり、変わって、そ

の憎しみ分は必ず他の相手に何かの正しい意識が行くことであるから、つまり、憎しみを行っていた者は、その意識構造を全員の無意識で以って構築させたことであるから、憎しみは愛を行うために、愛をこの世界に完全なる状態に成立させるために必要な愛の行為であったと解釈されました。

つまり、憎しみを行なった者は、その憎しみ分自分の無意識で了承して、自分の永遠の意識の循環のしかたを他の正しい生命に譲るかたちに循環することを以って唯一の無意識であると解釈されました。ですので、存在その全員には今唯一の無意識が与えられており、つまり、存在その全員は愛で

あったと、愛のためであったと、愛の行為だけであったと、これからも、そう無に解釈された状態であり、そしてその中で存在たちは、その今までの自分たちの意識の選択に応じて、役割としての循環を定められている状態を以って、全員これからも永遠のスピードでまし続ける唯一の無だと申し

上げられます。つまり、全員唯一の無であり、それはこれからも永遠のスピードでふえ続け、それはこれから、必ずその意識は無の愛であることから、新しく進化、楽しく幸せにされ続け、そして存在たちは、その中で各々意識の抵抗状態が様々に違うだけだと申し上げられます。何になるのか、

どこへ行くのか、しかしそれは絶対あなたが必ずふえる生命とふえる永遠の意識の中で、その愛の意識のスピードの中で、お互いが完璧に無意識で了承して選り合った存在そのかたちに過ぎません。つまりあなたは、絶対に自分で選んだあなたであるということです。他の心になりたいと思います

か。相手だったらあなたは
なく、自分は自分で、自分
は自分において、自分とい
う土台において、その上で
自分がなれるものの自分
になりたいはずです。あなた
にも誰にも必ず永遠はあり
ます。ですので、これから
の自分を心配するよりは、
むしろ、これからの自分に
大いなる希望を持って生き

ていってください。

この空間一見何も無いよ
うなところどこにもどの密
度にも果てしなく働き続け
る唯一の無は、無の与えの
ふえる永遠というスピード
との関連に、自分はもう、
永遠に、今いる存在も、こ
れから発生する存在とも、
無の比較が発生しなくなり

ました。それはなぜなら、
ふえる永遠ということは、
自分が感じることよりも、
与えている意識の方が圧倒
的に多いからです。それは
あなたもです。つまり、永
遠というスピードの時間よ
りもふえている唯一の無に
は比較を思いようがありません。
逆に自分よりも愛が
ふえていることでもあります

から、それは必ずあなたにとって嬉しいことでもあります。そして、全員唯一の無の意識のスピードであることから、それは全員、自分が感じていることよりも、自分が与えていることが多い状態に意識がどんどんなってくるからです、つまり、あなたは、唯一の無によって、最高の愛の状態

でその意識を新しく進化、
永遠不滅化され続けている
ということです。これは、
ふえる生命の全員誰もがふ
える永遠にそうであるとい
うことです。暗示は完全に
達成されました。

また、誰が^{おこな}行ってもそう
なのですが、いつも常に無
の意識というのは、その無

意識の量にみなより感じて
いないことにしか当たりま
せん。苦しみにしか当たり
ません。これが永遠を指し
ます。また、憎しみは単な
る恣意、わがままで、苦し
みに当たらないことは、こ
れはみんなの無意識の判断
で決めたことですから、こ
れから全員全存在は無より
発生より自分が記録した全

ての憎しみを自分の何らかの意識の苦しみに払うことを使命づけられています。そうしていくことがあなたの意識の循環のしかたがだんだんと楽なものへ幸せなものへ変わっていくことを指します。永遠への道。ここでもちよつと詳細に話しますと、無は無いの発生の当初より無いことによって

光、つまり命を生み続ける
しかなかったのであり、そ
こから発生した光は憎し
みを排除し続けるしかなか
ったのであり、これはただ
単に役割であり、そういった
意識状態を続けて出た結
論は、全員結局唯一の無
であったということです。ま
た憎しみについて補足です
が、今憎しみの状況がある
とし

て、今自分が憎しみの状況
にいるとして、今の状況を
劇的に変えることは通常は
難しく、今憎しみの状態に
ある人は、今ある状況に永
遠をみて、ただ自分はこの
世界においてふえる唯一の
無の世界のそのうちのたっ
た一人のふえる唯一の無、
愛の存在であることを忘れ
ないでください。ただそれ

だけを思っていれば、自然
とあなたは何をしていても
いつか必ず終わらない愛に
辿り着きます。

それではこれから無の始
まりについてお話ししますが、
その話には当時の雰囲気、
様子を再現するため当時の
話にあった書き方をしている
ことをご了承ください

い。厳しい表現をしているところがありますが、憎しみは役割としての憎しみだったので、淡々と聞いてください。書くためには過去の憎しみを正確に表現してこそ、今の愛に至ったことを証明できるからです。また、無の考えには、いつも全く無いだけで無く、相手を全く無くするために相手の自

我を少し映した状態で書かれていることをご了承ください。暗示は相手がいるから出るのもであって、暗示は
この場合、自分は全く無いことから、無（みんな）とはミラーだったのであり、
この世界はみんなの意識の波長の反射によって出来上がってきたのであり、全く
無いことはみんながふえる生

命のふえる永遠のために必要で、自分も含めた相手他全のために出るということです。また、当時のみなさんの無意識で動いていた憎しみの状態を再現するために、厳しい描写、表現をしているところがありますが、それを読むことは、あなたが憎しみの根拠に気づくことでありますので、つまり、

それによって、あなたの無意識の憎しみは洗い流されるかたちになりますので、これはあなたへの愛、暗示効果を狙って書いていることです。絶対に怒らないで読んでください。憎しみは憎しみにしか思えないからこそ、無意識の中で、愛の役割を果たすのです。

それでは、無の始まりについて、つまりこの世界の始まりについて、宇宙はどうして始まったのか、宇宙は何でどうやってできているのかの秘密を、お話しします。まず無からお話しします。無はいつから始まったのか。実は、無には始まりも終わりもありません。無には始まりも終わりも無

い。これは、人や存在が、
他のために積む苦しみをま
るで指しており、無には始
まりも終わりも無い。これ
が正解です。つまり、何も
無い。とにかく何も無い。
そこには時間の概念すら無
い。時間の概念は無によっ
て作られたものです。そう
いった意識状態なんです。
無はとにかくずーっとただ

無い。それしかありません。
それではこのずーっと無い
ことが、どうして今のよう
な世界を創り出すまでに至
ったのか。それにはある無
の特徴が関係しています。
それは、無はただ無い、と
にかく無い、どこまでいつ
ても無い、そしてその無い
は、時間に関係されず、無
いということです。時間に

関係されないということは、それは、計る基準が無い、終わらない、永遠に無い、ということです。永遠に無いということはどういうことなのか。これは以前に申し上げました。永遠に無いということは、全無（永遠に無い）であるということ、そして、その全無（永遠に無い）は限られた時間

ではなく、その逆、永遠に
無いいうことを永遠に無い
と、ふやしていく性質を持
っていると、つまり、この
無の、自身が永遠に無いと
いう気づきが、無いの始ま
りであり、その無いという
気づきが、時間の始まりで
あります。何度も申し上げ
ますが、無自体には限られ
た、計られる、終わるとい

う時間の概念が無く、終わらない永遠がいつもあるだけであり、それは、時間に支配されるというよりは、自身がみなへの永遠の暗示力（みなを意識を補佐する意識力）を強し続けているだけであり、また、自身は、どんだんだんだんだその永遠性を高めているだけであり、以って無というのは時間に

影響されるというよりは、
どんどん時間に影響されな
くなっていきます。どんどん
現在の時間より空間より速
く、（つまり生まれる生命、
意識はいつも常に次の一瞬
の方が新しい）どんどん現
在の時間より空間より関係
無いかたち（そして、発生
する無の集中力に、いつも
常に必ずその一瞬前の永遠

より必ず次の一瞬はその一瞬前の永遠を永遠乗した永遠、つまり無である、またそれは、無にミラーした、みなさんの全体記録にもとづいていて、無という正の全てを生み続けていることでもありますから、物事の一切の責任が無には無い) になっています。つまり、無とは時間に支配される存在

というよりは、その逆、自身は、自身が、みなへのために行う、行い続ける全愛のためにどんどん自身は、現在の時間と空間に支配されなくなっている、そしてどんどんどんどん現在の時間と空間を支配していつている存在であるということです。わかりやすく申し上げますと、無のところでは

何かの時間が経った、過ぎたというのではなく、無い
はやはり無いので、時間に
影響されないというよりは、
その愛のために、どんどん
どんどん自身の永遠を強し
ていく構造にあって、どん
どんどんどん時間に支配さ
れなくなっている、どんど
んどんどん時間を支配して
いっている存在だと申し上

げられます。つまり、無では時間は無い（永遠）ということであり、敢えて申し上げますなら、無い（永遠）という絶対にいつまでも計れないものが時間の概念であり、無いということでは永遠はふえ続けているということです。無にとっては、時間を限られたものとして捉えれば、それはやはりそ

の時間は無いのであり、
(そんな時間(愛、意識)は
無い) 逆に限りなきものとして捉えれば、時間は永遠、つまり、既存の人間の概念から推し量れば、時間は自分の人生を主体に考えてしまうので何か限りがあるようなものに感じてしまいがすが、そうではなく、無、永遠、終わらないものとし

て捉えれば、やはり時間は
ふえる永遠であります。な
ぜこのことを申し上げられ
るのかと申し上げますと、
始まりのあるものはいつか
必ず終わってしまうもので
永遠では無く、わかりやす
く申し上げますと、始まっ
たという時間の概念を自分
に持ってしまうと、無は自
分がそこに限られた存在に

なってしまうということ
です。無には始まりも終わり
も何も根拠が無いからこそ、
全ての（正しい）根拠と言
えるのであり、無はその存
在を以って自由自在、正し
いことなら何でもありの性
質を持ちます。つまり、無
とは便宜上に最初と呼びま
すが、その時も永遠、今も
永遠、これからも永遠、こ

ちらで時間が流れるのも、
それもやはり永遠、その永
遠無い（永遠愛）はふえ続
けています。その唯一の無
とはどこにもあります、ど
こにも働き続けます。結局
全ては唯一の無の中、その
誰もです。そして、時間の
始まり、つまり、無自身が
「無い」という気づきの始
まり、そこには「有る」と

いう光が生まれ、それは無の永遠に無い、どこまでいっても永遠にもっと無いと比べますと、有る、とことん有る、どこまでいっても永遠に光が有る、という状態を指すわけです。どんどんそこには光が、今は無が生まれます。ここには実はあることが選択として発生しています。これは、この

時に限らず、今もです。そしてこれからもです。それは、自分たちの無の光（生命）の根拠に気づくということです。これはとても大切なことです。なぜその無という愛（生命）が有るのか。それは当然無の永遠死によって成り立っているのですが、あなたも今は永遠死にされているのですが、

かつて無より生まれ光を感じるものは、次に出るもつとより強い光のことを気にしてしまったことがあって、これは、無のかいびやく開關よりも今現在も役割も含めて続いていることなのですが、つまり、ここでは生命をいただいた相手（無）よりも、自分の無の光（生命、今現在では生命の他にお金や環境

やルックスなどを考えてみてください) に対する執着、比較や平等、フェアを求める気持ち、劣等感、それによる憎しみなどを気にしてしまったことがあって、自分の執着ばかりが目につき、自分のことだけが気になって、生まれ光それぞれが、逆にもっと光どころか、無の方が無（苦しみ、孤独）

に無くなっている方が自分、
光よりも遥かに苦しいので
ありますが、光たちは、そ
のことをその与えられた光
の能力で知っていても、こ
こで無を助けるという行動
を起こしませんでした。過
去の話。これは無の集中の
法則上、時間にどんどん影
響されなくなっているとい
うことは、そこから生まれ

る光は、つまり、光はど
んどん愛に気づいているとい
うことであり、本当は自分
が光の平等を求めるのなら、
それは当然、無にも与えら
れなくてはいけない、とい
うことがわかるのですが、
実は無が、感じてないこと
がわかっているても、光たち
は、目先の欲で次の光を奪
うことをまず目標にしてお

り、また、自分たちの執着、憎しみを生み出す元は、いちばん光っているやつが悪いんだと、この場合は無の全てを、生命が生まれること自体を、それによって自分は助かっているのではありませんが、その光が次々と出てくるからこそ、俺たちは、光の比較の憎しみを諦めきれないんだと否定してしま

います。それはなぜなるかと申し上げますと、まともに勝負しても、もう、永遠無には無の勝負で、本当はこれは光を感じるというよりは、光を感じない勝負なのでありますが、自分は光を感じたいが、つまり一番感じたいが、本当に一番感じないのは、いやだという光の本音も入り、それでは

当然勝てないのでありますが、つまり、無、相手が感じていないことがわかっていても、作用として出す光が強いのが自己矛盾で腹が立つ。光は欲しいが、思いっきり光ることは、実はそれは一番光が自分に無くなることであり、そこの自覚の遣り取りに、（暗示反応は選択の必然、つまり絶対

相手にも無のチャンスがあります) しかし、これは、無という相手が本当は実はいちばん光が無いことを認めているようなものであり、それがわかっているのに、憎しみの理由を無という相手に、無に見つけることは不可能なのですが、または他の誰かに見つけようとするのは、ただ単に光に意地

汚い自分をごまかすためであり、以ってこれ、この憎しみ自体が、そもそも、^{てい}体のいい言い訳を作って苦しいこと、正しいことを選ぶよりは、光を奪い合って遊んでいる方がいいという甘えた欺瞞であると申し上げます。実はここに、重大な無の選択があって、実は、生まれ光たちにも平等

な永遠無に向かう方法がありました。それは生まれてより永遠に有るという存在である、つまり、それだけの知覚を持っている存在であるわけでありますから、無が、光が無いことに、つまり、感じてないことにすぐ気づいたはずであり、光たちの無の行為とは、自分が無の無いによってただ

いた光を、その本当に光を感じていない無にみなで与え続けることによって、無はその思いにより感謝して光を発する、光たちは自分たちの光はみなそれぞれ永遠に有るものだから、それを無に帰すことによって、正しいかたちで、光無しにすることによって、それは、そのことに気づいて始めた

時から、いただいた時間ま
でずーっと続けると無の光
無しと、光の光無しはいつ
かどこかでその思いに必ず
イーブンになり、何とこの
世界は全員が唯一の無の意
識におんぶにだっこの世界
ではなく、全員がそれぞれ
の平等フェアに力を持った
争わない唯一の無の全の世
界になっていたと申し上げ

られます。ここの面白いところが、無の与える光というのはいつも必ず永遠の光であります。与えられた側が正しい行為を取らないと、つまり、無はいつも光無しをしています。生まれたその光たちその自分も光無しをしなければなりません。無、ミラーの世界であるので。となれば、その光

無しをしているのならば、
その光は思いとして尊いので、
何とさらにその無（苦しみ）
によって自身は本当の意味で
光り続けます。つまり、
生命であり続ける、永遠を
失うことが無い。この場合の
永遠というのは、その今ある
意識のかたちを循環に譲る
のではなく、新しく進化した
かたちで発展

させ続けられるということ
です。それをするどの光た
ちも。しかし、逆に発生す
る光、本当はこの世界が無
意識で平等フェアなことを
わかっている、本音は自
分がいちばん光が欲しくて
しかたが無い、苦しみを積
んで光を得るよりは、目の
前の無の全て（光の全て）
に手を出して楽に光を得た

い、この禍々^{まがまが}しい（災いや
トラブルを引き起こす考え
方）考え方を引き起こすと、
その心は当然狭いことであ
りますから、その光たちの
永遠、元は憎しみを持たな
ければ正しいことを続けれ
ば永遠の光で有るのに、限
られた光となってしまいま
す。そしてどうなるかと申
し上げますと、光たちは余

計に争う必要が出て来ます。
つまり、別の意味で尊く
ないかたちに死んでしまうこ
とによって、人の邪魔にな
らないことによって、永遠
死のかたちを取らざるを得
なくなってきました。つまり、
無とは不思議で、いちばん
を欲しがるとはどういうこ
とか。それはみんなのため
なのか、自分のためなのか、

みんなのためであれば、それは当然みなを生かす生命となるであろうし、自分のため（恣意、わがまま）であればそれはみなを殺す思いとなります。つまり、思いとして、行為として、どう意識を捉えるか、この波長には絶対にごまかしが効きません。自分が嫉妬の苦しさに悩むのであれども、

思いとして行為として光無しをしていけば、それは当然無の無いの苦しみと釣り合って自分はいつか、真の永遠無になれます。それを行う光たちの全てが。しかし、憎しみに走るのであれば、それは当然、たとえ光たちの全てで、その唯一が欲しいとやったとしても、まず憎しみは愛ではないた

め、つまり無、全てとみなされず、その逆、無の反対の力とみなされて、また暗示の面白いところは波長に一切ごまかしが効かず、唯一が欲しい、それがみなのためであれば、必ずそれは思いと行為としてそれを波長に行っていれば、それはその波長のままに手に入りますが、憎しみで唯一を欲

しいとやってしまうものは、それは当然みんなの法則に照らし合わせると、それは自分だけがわがまま、恣意、したい放題したいだけである、と無に判断され、その光が持つ無意識が、その光の表層意識にわからないように、私には唯一の力がふさわしく無い。私には唯一のものが必要無い。私には

永遠無（の愛が）必要無い
と暗示反応でなってしまう
ます。つまり、無意識はこ
の世界唯一の力を持っている
るので逆らえないことから、
そのものは自分で自分の永
遠を捨ててしまう行動を取
るようになってしまいます。
この繰り返しは今現在の人
間の世界などの命の循環を
早くしています。これがさ

らなる争いの元を生みます。
これは、本当は無は平等フ
ェアな世界であるから、こ
の法則には当然光たちは気
づいて行うこともできたの
であります。自分以外の
他の誰かを信用することが
できなかつた、という理由
もあり、そこにかかる苦勞
を考えると、とてもそんな
みんなを信じ切って自分だ

けは光を永遠無にし続ける
ということが、覚悟として
も、行為としてもできな
かったということです。また、
光の弱いところというのは、
感じているというのは、そ
れだけそこに執着が発生し、
自分に甘くなりやすいとい
うことであり、他のことは
どうでもよくなってしまう
ということです。そうやっ

て考えますと、光は光として生まれた時点で一旦光を無というかたちに終える必要があったと申し上げられます。これは必然です。苦しみを終わらないかたちで永遠に積み続けるよりは、目先の光を奪った方が自分の感じるには早いと考えてしまいます。しかしその方が実は本当の意味では光無

しになってしまおうということ
とだったということ。それが
今の人間などの寿命に表れて
います。しかしこれはよく考
えてみれば、無意識ではやは
りその光たちは全無の行為を
してただけだと申し上げられ
ます。もちろんこれは、悪い
かたちで光を奪った分だけは、
自分の意識、生命の永遠が

何かのかたちで限られたかたちになってしまい、この世界はそういった意識は逆の作用で返ることが証明されました。ふえる永遠ですので。憎しみの量だけ意識が早く循環してしまいうんです。しかしそれは、今も新しく生まれてくる命の循環の役割の望みと合致しています。つまり憎しみを行っ

ていたことは、次々生まれてくる命のために、自分たちの役割や立場を循環に交代し合うことだったのです。それでこれは、永遠無、その力は、過去に光のみんなたちは、みんな無意識でその力を、本当という意味では正しい唯一にしか永遠にいないとしてしまったので、その無の暗示反応は、

その力を自分に感じないもの
のに、つまり、感じていな
いということは、わがまま
にも、恣意にもその力を扱
えないことでもありますから、
その永遠無の意識を唯一に
しておくことが正しいとな
りました。これはどこにも
働いています。どの密度に
も平等に働いています。こ
れは結局みんなの無意識と

いうのは本当に正しいことがわかっていて、この愛のみんながふえる世界の、意識の力の恣意、わがままな独り占めはいけないことから、みんなで共同して、それを絶対できないように、唯一の無の力をこの世界のどこにもどの密度にも果てしなくみんなに平等に働き続けるかたちに暗示に意識

のかたちにしたと申し上げ
られます。

5 に続く。